2．北摂地域の後・終末期古墳

発掘調査の結果、篭谷古墳は7世紀前半代に位置づけられるいわゆる終末期の横穴式石室墳であることが明らかとなった。北摂地域は兵庫県下では終末期古墳が濃密に分布する地域として著名であるが、この古墳の発見は当地域の古墳時代後・終末期を考える上でどのように位置付けることができるのだろうか。北摂地域の後・終末期古墳の研究の現状を概観しながら考えてみたい。

研究の現状

北摂地域では、数多くの古墳が残されているが、現在までのところ前・中期に位置付けられる古墳はほとんど知られておらず、ほとんどすべてが後・終末期の古墳であるといっても過言ではない。この特徴的な古墳の有り方から、栗山伸司、井守徳男両氏は当地方の古墳時代の特質について論じている。

栗山伸司氏は、古墳の存在が希薄な当地に6世紀以降急激に古墳が営まれていくことから、律令体制確立期にかけて諸勢力が進出し、開発が進められていったと考えた。特に、木棺直葬墳は東播地方の影響をうけて成立した在地性の強い古墳であり、横穴式石室の採用を文献にみえる諸氏族の移入と考えて、当地域の開発過程を説明した[1]。

また井守徳男氏は、三田盆地周辺の古墳について詳細に分析した結果、四・五世紀においては後進的な様相をみせる当地域が、大和政権にとって日本海への重要な交通路となるに至って諸勢力が進出したことを、金銅製冠、特殊偏壺、石棚などの特徴的な遺物・遺構の考察を通して示している[2]。

北摂地域における後期古墳

当地域の後期古墳で最も古い古墳群は盆地北部の内神古墳群、宮脇古墳群と南部の下田中古墳群とで、木棺直葬墳からなる5世紀末から6世紀前半のものである。これら低平な墳丘を持つ群集墳は、著名な小野市焼山古墳群など東播磨地方を中心に盛んに築かれており、当地方もそれと同質の文化圏にあったことがわかる。

この地に横穴式石室が登場するのは6世紀の後半になってからであるが、先の木棺直葬墳とはその分布に偏りがある。特にその差が顕著なのは、武庫川左岸には横穴式石室が採用されて後に群集墳というかたちで古墳群が営まれるのに対し、武庫川右岸では前代からの伝統的な埋葬法である木棺直葬墳が引き続き造営され、横穴式石室墳はほとんど認められない点である。この相違を造営集団の差異とする説が有力である。特に、右岸の貴志・奈良山・西山古墳群は吉士（紀氏）の営んだ古墳群と考えられている[3]。

このほか、根拠は薄いが、後の大神郷にあたる三輪地域は三輪氏の入植地と考えられているし、日下部は日下部氏の、八多は秦氏の一族が住み着いた土地とされている。

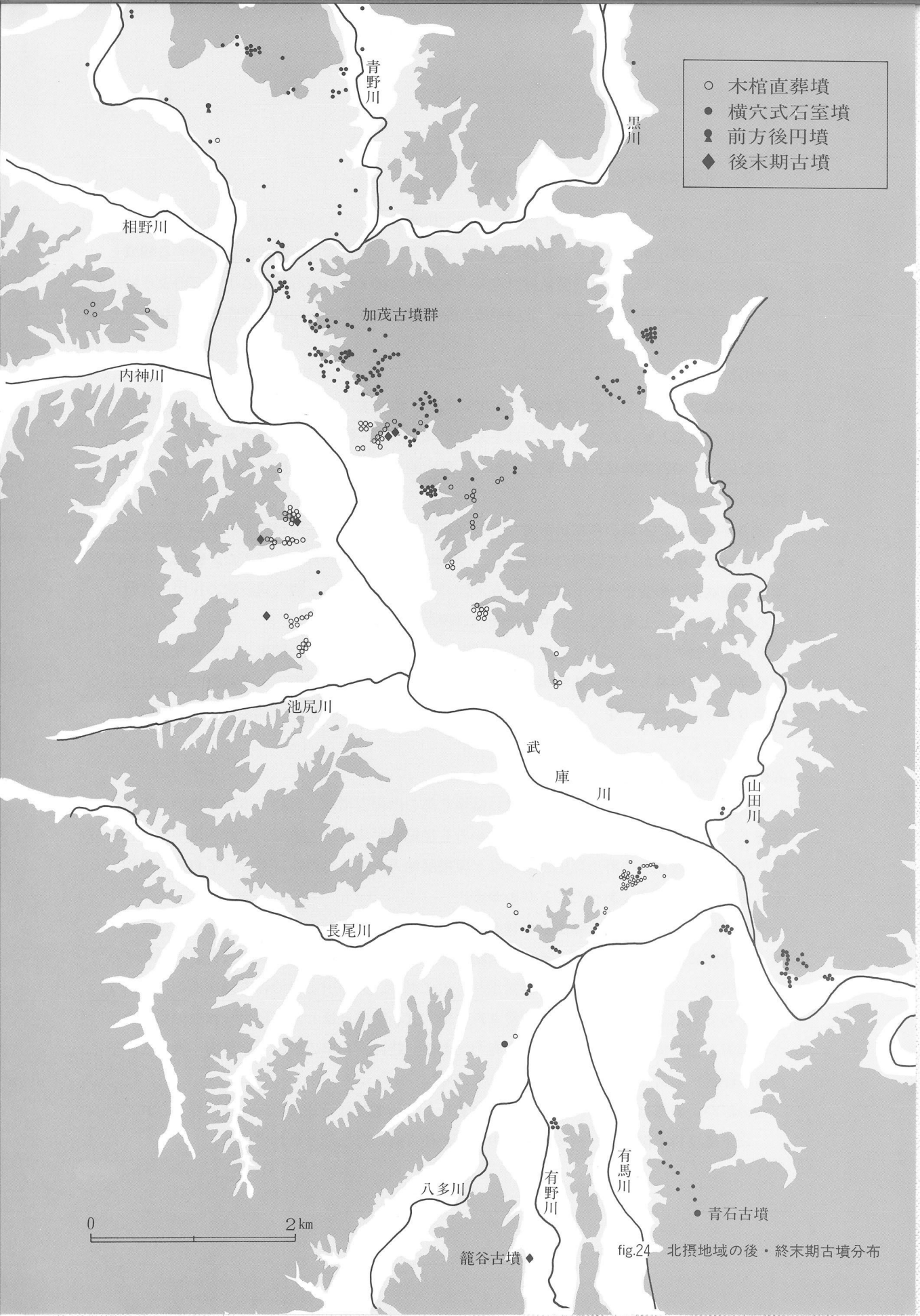

fig.24　北摂地域の後・終末期古墳分布

これらの説は古墳の分布からみて裏付けられるのだろうか。

fig.24に北摂地域の後・終末期古墳の分布を示してみた[4]。この図を見ると、木棺直葬墳と横穴式石室墳および終末期古墳の分布の傾向が特徴的に現れている。先にふれたように、武庫川右岸での木棺直葬墳の優位性は明らかである。しかし、武庫川左岸で横穴式石室墳が主体となっているかというと、かならずしもそうではない。むしろ、木棺直葬墳が主体であったところに、加茂古墳群を中心とした横穴式石室墳が異様なまでに集中して築かれているのである。加茂周辺の武庫川左岸を基盤とした勢力のみで、はたしてこれだけの古墳群が築けたであろうか。これとは反対に、旧有馬郡の中心地と考えられる三輪地域周辺には古墳は皆無の状態である。この地の開発が遅れていたわけではないことは、弥生時代後期～古墳時代前期の大集落である川除・藤の木遺跡の発見[5]により明らかである。また、加茂古墳群は、個々の古墳の規模、全体の密集度など傑出したものであり、盆地中央部の三輪地域をも含めた、最も勢力をもった集団の墓域であったと考えたい。

石棚を持つ古墳

この地域の後期古墳を特徴付けるものに、石棚を持つ横穴式石室墳がある。石棚を持つ古墳は和歌山県岩橋千塚古墳群や北部九州、徳島県西部の吉野川流域にはまとまって造営されているが、これらの地域を除くと、残りの大部分は畿内北辺部に集中している。

北摂地域ではこれまでに、神戸市尼崎学園4号墳[6]、三田市加茂36号墳（竹内古墳）[7]、三田市東仲古墳[8]の3例が報告されている。

これらの石棚は、その用途については不確かな点が多いが、構築技法上ではほとんど共通している。それは、通常石室奥壁の中程に取りつき、玄門部の天井石とほぼ同じ工程で積み上げられる点である。したがって玄室入口近くの側壁に棚の取りつく東仲古墳の例については通称「石棚」には分類するべきではないと考える。

周辺の石棚を持つ古墳の例は、丹波地方では、氷上郡山南町野田古墳群[9]、多紀郡篠山町岩井山3号墳[10]、京都府亀岡市小金岐76・77号墳、同市鹿谷2号墳、同市拝田16号墳[11]、丹後地方では、京都府中郡大宮町新戸1号墳[12]、播磨地方では赤穂市木虎谷2号墳、同鳳張古墳[13]、加西市剣坂古墳、加古川市志方大塚古墳[14]がある。以上の11例の分布をみると、特定の地域に集中するというよりも、むしろまんべんなく広範囲に分布する傾向が認められる。また、前方後円墳である拝田16号墳と新戸1号墳はもちろんのこと、各古墳はそれぞれの地域では古墳群中で最大規模か、最も中心的な位置を占めている。したがって、石棚を持つ古墳の被葬者はその所属する集団のなかでも有力な者と考えられ、近畿周辺部に存在する石棚については、畿内の政権により特にゆるされたもののみ構築できた感すらする。

終末期の古墳

三田盆地周辺は、7世紀以降のいわゆる終末期古墳の濃密に分布する地域として知られてい

る。これまでに知られている5基の古墳はそれぞれにその様相を異にしているが、基本的には次の三つに分類できよう。

その一つは盆地南部の西宮市青石古墳と神戸市北神ニュータウン内20号地点古墳のような最終末の横穴式石室である。

青石古墳[15]は、花崗岩の割石を使用した無袖式の横穴式石室を持つ、7世紀の初頭の古墳である。その形態からは北神ニュータウン内20号地点古墳に先行するものと考えられる。

北神ニュータウン内20号地点古墳[16]は、石室全長6.6m、幅1.2mの無袖式の横穴式石室を持つ古墳で、墳丘の前面に6個の列石を有している。石室内からの出土遺物はほとんどなかったが、周溝から出土した須恵器から築造時期は7世紀前半と考えられている。

これらの古墳と籠谷古墳とを比較すると、石室の構築方法に違いはあるものの、単独墳であることと、横穴式石室の形態を強く残しながらも単葬墓であるという点で共通している。

二つめは、青竜寺裏山1号墳[16]のように、横穴式石室系統の切石積みの横口式石槨の古墳である。

青竜寺裏山1号墳は、小型の切石積みの竪穴式あるいは横穴式の石室を持つ。この古墳を最も特徴付けるのは、石室内部に使用された磚である。出土状態からは、石室の床か棺台として使用されたものと推定されている。

三つめは、青竜寺裏山2号墳、西山7号墳、奈良山12号墳、奈カリ与古墳[17]のように板石を使用した横口式石槨系の古墳である。これらの古墳は、いずれも7世紀の前半代の年代が与えられている。

これらの三つのタイプの終末期古墳は、すべて7世紀の前半代にその年代が考えられているが、その形態からみて、1→2→3の順にその推移が考えられよう。籠谷古墳は、このうちの第1のタイプに分類でき、したがって7世紀の前半でも古い部類に属するものとかんがえられよう。

籠谷古墳被葬者の出自

さて、終末期の古墳の分布状況からみると、各古墳は群集墳中にあり、それぞれそれ以前の古墳の系譜上におくことが可能であろう。こうした点からみると唯一単独で存在する籠谷古墳は特殊な存在である。これを、この地の首長層がようやくこの時期になって台頭してきたと考えることができよう。また、これとは逆に、籠谷古墳がたんなる二郎地域の首長墳ではなく、日下部古墳群の系譜上における古墳で、その墓域をこの地においたという可能性も指摘しておきたい。

いずれにせよ、後の郷単位程度で終末期の古墳が分布している事実からすると、これら終末期の古墳は、律令期の里長・郷長に移行していく在地有力者の墓と考えるのがいまのところ妥当であり、籠谷古墳の被葬者もこうした在地有力者であると考えておきたい。

注１．栗山伸司　1975　「北摂における古代勢力の性格－有馬郡内の動向を中心として－」『古代研究』６

２．井守徳男　1986「畿内周縁部における古墳の展開と終末－兵庫県三田盆地における群集墳と終末期古墳の関連を例として－」『歴史における政治と民衆』

３．注１・２文献

４．三田市教育委員会1989『三田市遺跡分布地図』をもとに作成した。

５．1987年に兵庫県教育委員会が発掘調査。

６．『新修神戸市史』１自然考古編　1989

７．注２・４文献

８．注１文献

９．注２文献

10．多紀郡教育事務組合教育委員会1974『篠山・多紀町の古墳』

11．野田川町教育委員会1985『高浪古墳発掘調査概報』

12．大宮町教育委員会1979『裏陰遺跡発掘調査概報』

13．『赤穂市史』第１巻　1981

14．栗山一夫1934・1935「播磨加古川流域に築造されたる古墳及び遺物調査報告」『人類学雑誌』49-8,50-2

15．西宮市教育委員会1974『青石古墳発掘調査報告書』

16．注６文献

17．注１・２文献